慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	藤原師輔五十賀屏風に関する一考察
Sub Title	
Author	山本, 令子(Yamamoto, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1996
Jtitle	三田國文 No.24 (1996. 12) ,p.1- 8
JaLC DOI	10.14991/002.19961200-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19961200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

藤原師輔五十賀屏風に関する一考察

山本　令子

一、はじめに

天徳元（九五七）年四月二十二日、村上天皇の女御藤原安子は飛香舎に於いて、父師輔の五十算を賀した。『西宮記』には、この折、天皇が下賜した品々として「左右馬寮御馬五疋、夏冬衣五具、屏風、度者五十人」を挙げる。既に、先学諸氏[1]によって聚集されてきた、この屏風の料歌と憶しきものを次に示す。

①「元真集」一七～二五
②「頼基集」一五
③「中務集」六八～七七
④「拾遺集」一二八（兼盛）
⑤「清正集」二二（～二七）
⑥「拾遺集」二八二（好古）
⑦「拾遺集」一一六一（元輔）
⑧前田家本「元輔集」五二～七六
⑨前田家本「元輔集」一三～三四及び歌仙家集本「元輔集」一四八～一五一（前田家本一七と歌仙家集本一四九とは重複）

この内、⑧・⑨の前田家本「元輔集」の両歌群に就いては各れも、師輔の他、師輔兄実頼、師輔弟師尹の賀とする御論[2]があり、⑦に就いても⑧・⑨と一連の師尹五十賀の料歌とする説[3]が提示されている。又、⑤・⑥に就いては、師輔五十賀の折の屏風ながらも、伊尹経営による別度の屏風の料歌とする説[4]があるなど、検討の余地が残されている様に思われる。そこで、本稿に於いては、③～⑤に挙げた資料に就いて少しく考察を加えたい。

［参考］

二、「中務集」歌に就いて

まず、「中務集」に於ける当該歌群を、書陵部本・西本願寺本によって挙げる。

［書陵部本］

坊城殿五十賀、中宮のし給ふに、村上先王の仰せにて召

ししかば、屏風の料

吹く風に匂ひ変はらぬ梅の花誰が染めかけし色にかあるら

む　（八五）

子日、水のほとりの松

水底の色さへ変はる小松原花散りぬとや音をば鳴くらむ　（八六）

又、桜

山桜人知れねども清滝のそこなる花や流れ出づらむ　（八七）

岸近き松に藤懸かれり

岸近き松に懸かれる藤波は春の名残に立ち止まらなむ　（八八）

又

住吉の岸の藤波春深く幾しほにかは色まさるらむ　（八九）

山吹

山吹の花の盛りは蛙鳴く井手にや春も立ち止まるらむ　（九〇）

又、卯花

白波の寄るかと見えて遠方の末のまにまに咲ける卯の花　（九一）

［西本願寺本］

坊城の右の大い殿の五十賀中宮し給ふ、村上の先帝の召

したる、紅梅

吹く風に匂ひ変はらぬ梅の花誰が染め出でし色にかあるら

む　（六八）

子日

水底の色さへ変はる小松原千歳千代添ふ野辺に来にけり　（六九）

岸近き松に懸かれる藤波は春の名残に立ち止まらなむ　（七〇）

山桜人知れねども清滝のそらなる花や流れ出でぬらむ　（七一）

住吉の岸の藤波春深く幾しほにかは色まさるらむ　（七二）

五月雨の夜も明けがたに嘆くかな物思ふことや秋となるら

む　（七三）

沢水に影の傾ぶく青柳は蛙の声をあはれとや聞く　（七四）

山吹の花の盛りは蛙鳴く井手にや春の立ち止まるらむ　（七五）

白波の織るかと見えて遠方の岸のまにまに咲ける卯の花　（七六）

片岡の御垣原のうぐひすは花散りぬとや音をば鳴くらむ　（七七）

一見して気付かされるのは、賀歌には相応しくないと思われる表現（傍線部）の存在である。賀の歌、とりわけ算賀の歌という性格を考えると、「嘆く」（西本願寺本七三）「傾ぶく」（同七四）「鳴く」（同七五／書陵部本九〇）「花散る」（西本願寺本七七）といった語句は忌避されるべきであり、これらの表現を含む歌が師輔五十賀のために、中務の如き専門歌人によって詠進されたとは考え難い。西本願寺本七三・七四の二首が書陵部本には見えないことも、これらの歌々が同一の屏風の料歌ではないことを物語っているのではなかろうか。

次に、滝の画様に就いて検討しておきたい。「中務集」（書陵部本八七／西本願寺本七一）に於いては、山桜と共に春の清滝が詠まれているが、「元真集」に於いては配列上、夏の滝が詠じられていると考えざるを得ない。

「元真集」

同じ十二月、春宮女御藤壺の御局にて、父の御五十賀内にせさせ給ふしに、その御屏風、障子宣旨に奉る

はじめの春、男、女の片岡の水のほとりにて遊ぶ

子の日する山下水の影しあれば千歳の松は引かで見えけり　（一七）

梅の花ある所に人遊ぶ

山風にまかするよりは梅の花匂ひの宿に尽きずもあるかな　（一八）

松に藤の懸かりたる所

春深み咲きて匂へる藤の花松ぞ千歳の宿りなりける（一九）

人の家の花橘に郭公鳴く

世に慣れぬただ一声も郭公花橘に隠れてぞ鳴く　（二〇）

滝ある所に

＊山高み落ち来る滝の白糸は虚に乱るるたまかとぞ見る　（二一）

池辺に鶴立てり

葦田鶴の千代の影すむ池水は波さへ立てでのどけかりけり　（二二）

同題

水底に沈める千代の影を見て池の葦田鶴のどけかりけり　（二三）

頭白き翁のある所に、雪降る

歳深き色とし見れば白雪の降るにも己が上をこそ思へ　（二四）

人の家に竹のある所

窓近き常葉の影は呉竹の世を経て深き緑なりけり　（二五）

この点に就いて、小暮康弘氏[5]は「場面は同じでも、元真は『滝』そのものを詠んで季節を夏とし、中務は『さくら』を詠んで春としたのである。」と説明された。然しながら、或る場面を春に取り做す、或いは夏に取り做すといった季節の撰定までもが詠者の裁量の内であったと考えることは、その画面に描き込まれた画材――たとえば、ここでは滝以外にも様々な景物が描かれていたであろう――の存在からも肯首し難い。せいぜい、画面の何処に焦点を合わせるか、或いはその景を特定の名所に取り做すか否かといったところまでが、各人の判断に任せられていたのではなかろうか。従って、元真詠と中務詠とは異

なった画面に対して詠まれたものと考えざるを得ない。そして、春夏二季にわたって滝の画様が描かれた屏風の存在を想定するよりはむしろ、これらが別々の屏風の料歌であったと想像する方が自然ではなかろうか。すなわち、当該中務詠も又、師輔五十賀屏風のために詠進されたものではない様に思われるのである。

同様のことが、松に懸かる藤の画様に就いても窺われる。中務詠（書陵部本八八・八九／西本願寺本七〇・七二）が水辺の景を詠じているのに対して、「元真集」一九番歌は水辺であることを示す表現を用いていない。そして、仮に、この松に懸かる藤の画様が水辺に設定されていたとするならば、同じく水辺に設定されている子日の画様（「元真集」一七・「中務集」書陵部本八六／西本願寺本六九）とつき過ぎるのではなかろうか。従って、ここでも又、中務詠は元真詠とは別の屏風の料歌であった可能性が高いと云わざるを得ないのである。

さて、以上見てきた様に、「中務集」当該歌群の内、書陵部本八七番歌以下／西本願寺本七〇番歌以下が一連ではないとするならば、書陵部本八五番歌／西本願寺本六八番歌の詞書は一体どこまで係っているのかという疑問が生じる。換言すれば、書陵部本八六番歌／西本願寺本六九番歌の帰属が問題となるのである。ここで注目されるのが、先にも触れた水辺子日の設定である。すなわち、『上代倭絵全史』『上代倭絵年表』に挙げる子日の図様四一例（内、重複が一組あり、実質四〇例）の内、水辺であることが確認されるのは、当該屏風における「元真集」一七番歌のみであり、「古今六帖」子日の項（三六～四二）に収める七首にも水辺の例は認められない。又、「夫木抄」に於いても子日の項（一三七～一七二）に収める三六首の内、水辺の景を詠むのは、当該元真詠のみであり、水辺子日という設定が甚だ特異であったことが知られるのである。従って、共に水辺子日を詠じる元真詠と中務詠とは、同じ画様に対して詠まれた可能性が高いのではなかろうか。すなわち、「中務集」書陵部本八六番歌／西本願寺本六九番歌は師輔五十賀屏風の料歌であったと見做したい。

かくして、従来、西本願寺本により一〇首一連として指摘されてきた中務の本屏風料歌は、書陵部本八五・八六／西本願寺本六八・六九の二首のみに限定すべきかと思われるのである。

三、「拾遺集」一二八番歌に就いて

彰考館本「兼盛集」は次の三首から始まる。

九条の右大臣の家の屏風に

あやしくも鹿の立ちどの見えぬかな小倉の山に我や来ぬらむ

（拾遺集一二八　九条右大臣家の賀の屏風に　平兼盛／拾遺抄七七　九条右大臣賀の屏風　兼盛）

ふしづけし淀のわたりを来てみれば解けむ期も無く氷りしにけり

（拾遺集二三四　屏風に　平兼盛・三句　今朝見れば／拾遺抄一四〇　屏風の絵に　兼盛・三句　今朝見れば）

時雨ゆゑ被く袂をよそ人は紅葉を払ふ袖かとや見る

（拾遺集二二二　屏風に平兼盛／拾遺抄一三七　屏風に兼盛）

この内、「ふしづけし……」の歌は「長能集」にも見え、[6]藤原長能の詠作かとする説[7]もあるが、「長能集」諸本に於いては花山院歌合の出詠歌群に含まれており、書陵部本（五〇一・四〇）「長能集」詞書には、「いづれの年にかありけむ、花山院、九月九日歌合せさせ給はむとてありける、とまりにけれど、歌は人々奉れと仰せられければ」と記されている。当該歌が花山院の歌合のために詠じられ、歌合の中止にも拘わらず院に提出されたものであるならば、花山院親撰といわれる「拾遺集」に於いても兼盛の屏風歌として入集していることは説明し難い。ただ、当該歌群に就いては、歌合詠ではないものも含まれている他、春や夏の景物題と「夏」「冬」などの四季題とが存することから、少なくとも二つ以上の歌合の出詠歌から成るとの指摘[8]があり、先掲の詞書が「ふしづけし……」の歌の詠作事情を伝えているとは考えにくい。然しながら、高橋正治氏[9]が指摘された如く、『拾遺集』撰集作業への長能の関与を視野に入れるならば、当該歌が兼盛詠として入集していることを長能も承知していることになり、当該歌は兼盛詠と考える方が自然であろう。従って、「ふしづけし……」の歌は、兼盛の詠作であり、何らかの事情[10]で「長能集」の歌群に混入したものと考えたい。

続いて、「しぐれゆゑ……」の歌に就いても検討を加えたい。この歌は、「能宣集」にも屏風歌として見え、大中臣能宣の歌かとする説[11]もある。そこで、「能宣集」の当該歌及びその前後の歌を見ると次の如くである。

十月、馬に乗れる人、河を渡るに、時雨のすれば袖を被く、紅葉散れり

もみぢ葉も時雨も降れば渡る瀬の色さへ深くなりまさるかな　（四〇二）

又

時雨ゆゑ被く袂をよそ人は紅葉を払ふ袖かとぞ見る　（四〇三）

本のまゝと本に、この歌は、こと人のとおぼゆれど

時雨るれば紅葉の色も渡る瀬の水際も深くなりまさるかな　（四〇四）

すなわち、「十月、馬に乗れる人、……」の画題に対して、四〇二・四〇四の二首は、時雨・紅葉という景物と共に、「渡る瀬」の語に拠って、馬に乗り河を渡る人物を描き出している。[12]これに対して、当該四〇三番歌には、「馬に乗れる人、河を渡るに」の心が足りない。おそらくは、時雨のために袖を被く動作と紅葉の散る景との一致に拠り、類歌として参照されたものが混入したのではなかろうか。高橋正治氏・増田繁夫氏[13]が指摘された様に、西本願寺本左注に「この歌は、こと人のとおぼゆれど」とあることも、以上の推察を裏付けよう。従って、「しぐれゆゑ……」の歌に就いても、能宣作説は採らず、兼盛の詠作として考えていきたい。

さて、以上の検討に拠れば、彰考館本「兼盛集」の冒頭三首は各れも兼盛の屏風歌と考えられよう。それでは、詞書「九条の右大臣の家の屏風に」は、一体どこまで係かっているのであろうか。この点に就いては、残念ながら不明という他ないが、三首一連である可能性も否定し得ない。

又、「九条右大臣家の屏風に」（拾遺集）、「九条の右大臣の家

の屏風に」（彰考館本「兼盛集」）といった詞書の記し方は、天皇から下賜された屏風を指すにはやや適切さを欠く様に思われる。伊尹が経営した別度の屏風である可能性はないとはいえないものの、単に師輔家に於ける何らかの賀のために調進された屏風の料歌であったかもしれない。

各れにせよ、「拾遺集」一二八番歌を取り上げるに際しては、彰考館本「兼盛集」冒頭部分をも視野に入れて、尚、考えていく必要がある様に思われるのである。

四、「清正集」歌に就いて

「清正集」二二番歌は「右大臣の賀に、頭中将のし給ひける屏風に」という詞書を持つ。「頭中将のしたまひける」を、伊尹が主体となって経営したと見るか、安子・村上天皇の手足として調進にあたったと見るかという解釈の相違はあるものの、当該歌を師輔五十賀のために詠進されたものとする点では諸氏一致されている。この二二番歌に加えて、藤田一尊氏[12]は、「清正集」二三～二六の四首をも師輔五十賀屏風の料歌とされたが、この点に就いて少しく検討を加えたい。次に、「清正集」の本文を挙げる。

右大臣の賀に、頭中将のし給ひける屏風に

夏の夜も涼しかりけり山河は波の底にや秋は宿れる（二一）

五月、鞍馬といふ所に女ども詣であひたるに、郭公の声す

五月闇鞍馬の山の郭公おぼつかなしや夜半の一声　（二三）

鞍馬山暗く越ゆれど郭公語らふ声をそれと知らずや（二四）

国へ下りける人々別れを惜しみけるに、郭公待つ心をさ夜更けて今も鳴かなむ郭公別れを惜しむ声と聞くべく　（二五）

七月七日、七夕の心

一年に一夜のみ逢ふたなばたを立ちな隠しそ天の河霧　（二六）

同じ頃の屏風に

天河霧立ちわたりわたりては誰が衣手かひちまさるらむ　（二七）

二七番歌の詞書に「同じ頃の屏風に」とあることから、一見、二二番歌の詞書「右大臣の賀に、頭中将のし給ひける屏風に」が、二二～二六の五首を統括しているかの様に見える。然しながら、細かく検討していくと幾つかの疑問が生じる。

まず、賀歌、殊に算賀の歌には相応しくない表現（傍線部）が目につく。「おぼつかなし」（二三）「鳴く」「別れを惜しむ」（二五）といった語句は算賀の屏風の料歌としては如何なものであろうか。又、二六番歌の「立ちな隠しそ」も「な……そ」で打ち消されてはいるものの、些か気に懸かる表現である。

更に、二三・二四番歌には鳴く郭公が、二五番歌には待郭公が各々詠まれていることも、これらを一連と考え難くするものである。屏風の規模・趣向にも拠ろうが、或る屏風の内に複数の郭公の画様が含まれていたとは想像しにくい。又、二五番歌の詞書「国へ下りける人々別れを惜しみけるに、郭公待つ心を」は、画題らしからぬふしがある。国へ下る人々が別れを惜しんでいる情景はともかくも、助動詞「けり」に拠る叙述は不審と

いう他ない。そして、別れを惜しむ人々が郭公の一声を待っているという設定も詳細過ぎるきらいがある。二五番歌は、屏風歌というよりは寧ろ清正の実生活上の詠作であったと見るべきではなかろうか。或いは、二六番歌に就いても、屏風歌と見做す必要はないのかもしれない。すなわち、以上見てきたところに拠れば、「清正集」二三～二六の四首は、二二番歌と同一の屏風に対して詠じられたものとは見做し難く、師輔五十賀屏風の料歌としては従来通り二二番歌のみを考えておきたい。

五、おわりに

本稿に於いては、師輔五十賀屏風の料歌として指摘されてきた歌々の一部に就いて些かの考察を加えた。すなわち、「中務集」歌に就いては、書陵部本八五・八六番歌／西本願寺本六八・六九番歌のみを、同じく「清正集」歌に就いては二二番歌のみを考えるべきであることを指摘し、「拾遺集」一二八番歌兼盛詠に就いては、彰考館本「兼盛集」冒頭部分をも視野に入れて見直す必要があることを確認した。この内、「中務集」書陵部本八七番歌／西本願寺本七〇番歌以下を除外することが認められるならば、従来これらをも組み込んだ形で行われてきた画題の対照にも再考の余地が生じるのではなかろうか。とすれば、事は前田家本「元輔集」歌の帰属にも関わってくる様に思われるが、これらの問題については他日を期したい。

注

和歌の引用は、『私家集大成』『新編国歌大観』に拠ったが、私に表記を改めた箇処がある。

(1) 家永三郎氏『上代倭絵年表』(座右宝刊行会・昭和十七年／改訂版 墨水書房・昭和四十一年)・池田亀鑑氏『元輔集』解説(尊経閣叢刊・育徳財団・昭和十七年)・菅根順之氏「前田家本元輔集成立考」(『二松学舎大学論集』・昭和四六年)・萩谷朴氏「清少納言の父元輔の閲歴」(『国学院雑誌』昭和五一年十二月)・上村悦子氏『蜻蛉日記』(講談社学術文庫・一九七八年)・藤田一尊氏「『蜻蛉日記』〈小一条左大臣五十賀の屏風歌〉に関する一考察—『元輔集』との関連から—」(大東文化大学『日本文学論集』十一号・昭和六二年)、「『蜻蛉日記』〈小一条左大臣五十賀の屏風歌〉再説—『元輔集』との関連と屏風歌の制作法について—」(大東文化大学『日本文学論集』十二号・昭和六三年)、「屏風歌の制作法瞥見」(大東文化大学『日本文学論集』十三号・平成一年)、「屏風絵と屏風歌との相関性をめぐって」(大東文化大学『日本文学論集』三十号・平成三年)「平安朝屏風歌の史的考察—十世紀後半の動向と特徴—」(『日本文学研究』第三十二号・一九九三年)・小暮康弘氏「応和元年十二月十七日昌子内親王御裳着の御屏風歌」(大東文化大学『日本文学論集』十号・昭和六十一年)、「「天徳元年四月廿二日」右大臣藤原師輔五十の賀の屏風歌」(大東文化大学『日本文学論集』三十号・平成三年)・藤本一恵氏『清原元輔集全釈』(私家集全釈叢書8・風間書房・平成元年)小町谷照彦氏『拾遺和歌集』(新日本古典文学大系7・岩波書店・一九九〇年)・後藤祥子氏『元輔集注釈』(私家集注釈叢刊6・貴重本刊行会・平成六年)・『大日本史料』など。

(2) 詳細については、(1)に挙げた諸氏の御論を参照されたい。

(3) 藤田氏「屏風絵と屏風歌の相関性をめぐって」(1)

(4) 『大日本史料』・小暮氏「「天徳元年四月廿二日」右大臣藤原師輔五十の賀の屏風歌」・藤田氏「平安朝屏風歌の史的考察—十世紀後半の動向と特徴—」(1)。

(5) 「[天徳元年四月廿二日]右大臣藤原師輔五十の賀の屏風歌」(1)。

(6) 書陵部本(一五〇・七二九)長能集一三九(花山院の歌合に召ししかば)

拾　兼盛歌也如何

遺　ふしづけし淀のわたりを今朝みれば解けむ期も無く氷りしにけり

書陵部本(五〇一・四〇)長能集四六(いづれの年にかありけむ、花山院、九月九日歌合せさせ給はむとてありけるとまりにけれど、歌は人々奉れと仰せられければ、冬)三句今朝見れば　四句解けむよも無く

神宮文庫本長能集一三九(花山院の歌合に召ししかば冬)　三句今朝みれば／同一八四(異本からの補入部分)　冬　三句今朝みれば　四句　解けむよも無く

(7) 小町谷氏先掲書(1)一二八番歌脚注、萩谷朴氏『平安朝歌合大成　増補新訂』第二巻「一一〇　寛弘年間花山法皇歌合雑載」・同朋社出版・一九九五年。

(8) 平安文学輪読会『長能集注釈』(塙書房・平成元年)一三〇番歌注。

(9) 高橋正治氏『兼盛集注釈』(私家集注釈叢刊4・貴重本刊行会・平成五年)一〇六番歌〔補説〕。

(10) 高橋氏先掲書(9)一〇六番歌〔補説〕には「何かの理由で紛れ込んだものか、あるいは花山院の立場にぴったりであるので引用したものが載せられたかということになる。」と説かれている。

(11) 小町谷氏先掲書(1)二三四番歌脚注。

(12) 増田繁夫氏『能宣集注釈』(私家集注釈叢刊7・貴重本刊行会・平成七年)は「四〇四の歌は、四〇二の歌に整えられる前段階の歌、草稿が何らかの事情でここに記されたもの、と考えられる。歌意は四〇二と同じだが、歌としてはやや劣っている。」とされた。

(13) 高橋氏先掲書(9)一〇七番歌〔補説〕・増田氏先掲書(12)四〇二～四〇四番歌〔語釈〕。

(14) 「平安朝屏風歌の史的考察――十世紀後半の動向と特徴――」(1)。

(やまもと　れいこ)